成形圖說

農事部　四

太政官文庫
和書門 類
八三〇二 號
函
架
三〇 冊

内閣文庫
和書 類
八三四二 號
三〇 冊
一九六 函
一九 架

内閣文庫		
番號	和 8342	
冊數	30 (4)	
函號	196	98

国立公文書館 National Archives of Japan

成形圖說卷之四

目錄

秋田
浸種 附 初秧
耕耘
淤蔭 附 肥養
田廬
鷹偏 附 田儛

明治十一年購求

成形圖說卷之四

農事部 秋田類

苗代萬葉集○俗云ふへしろ田を代といひ ふうしは前ニ出せり即秋田なり

苗床床ハ地ノ咎也 母田奥羽ニて苗代田を稱せ早秋と擇て標を設て明年まで復物植ど

秧田天工開物○正韻秧音央禾苗正字通苗初生尚稺分科植之非秧即栽禾也

蕃名ゾルーイセル

苗代ハ一區の内ニても尤土宜ニ相て治ふしく最審ニ度ふ宜しまげ二番打起の時ニ堅塊なきやうに把勞へ一ずがきに菖蒲或ハ篠葉青草類の莁を二把ばくうづゝ其上ニ肥糞と滸て洗ちとのふあり○凡苗代ニ種蒔

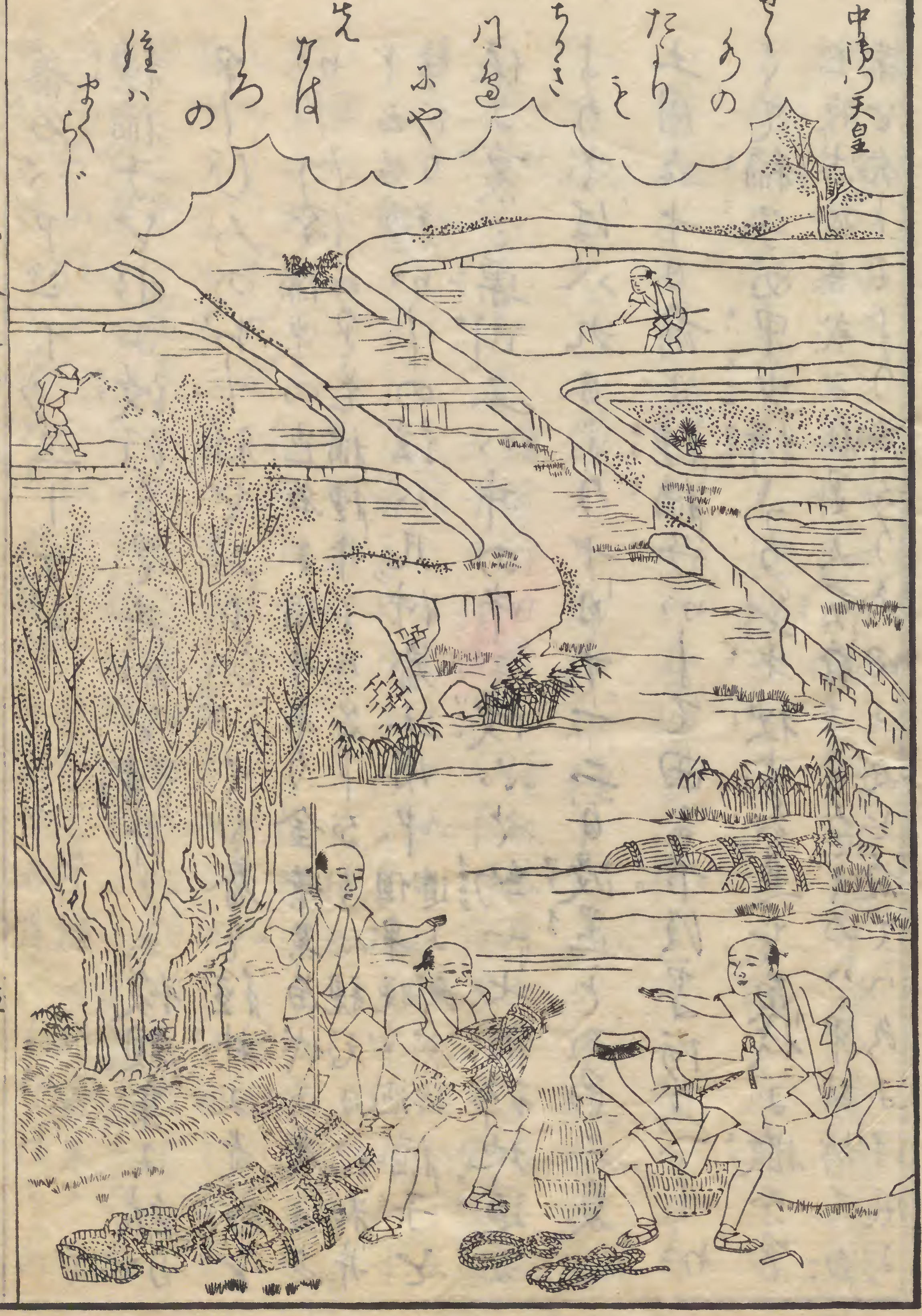
ゐんとして八穎水を戴ハ閉まハ縱つて既に前條にてゐ
條を三日間にハ水を閉縱ものとする閉バ苗葉繁盛き
縱バ莖立ちぜるなり縱閉とハ水を貯て苗を潰れぬなり凡
苗代に乗秧を撒たら一畝に一升の積なて一畝の苗ハ
三段ばかりに栽るなれべし上田は七升此苗を一段に
栽下田ハ八升許るるべし 天工開物ニ凡秧田一畝所ㇾ生秧供ス栽廿五畝ニ
いも梨花開る頃を苗代時といへども地氣によるべし
貫之集にはいしごまの山乃櫻花を見てなち方人を種
八蒔きける 武藏風土記ニ曰荏原郡櫻田夫苗代ハ毎年農者櫻開ル之時採ル苗故ニ有ニ此名
耕の初發ふして秋成乃登行を期すれバ特に吉日を擇

びて二月土用の初午を以て稲種を播せり 或ハ二月の中午ノ日をもちゐれハ偶日を用て奇日を忌めり 此より前正月望に田家擧族潔齋し米占
をなして必ず新しき白茅を採稲の葉をなぞらひ柳の枝して
玉籤となづく 玉籤古歌に詠めり又五十籤とも云後德大寺殿に苗代の水になり五十串さていそぐや田子の手向ハなくとも 西州にても玉箸などいふ 籤の頭に正月の若餅を挾枝
葉にて裹みて竈の上に挿稲裹と称ふ既に苗代に種蒔
て后稲裹と宿鉢とを水口に插て粢を盛田神に饗まつ
る所謂手草を挽きて也又標繩を引き鷹備を設く是農夫
敬てゐの歳あるを祈の淺也予按好忠か歌にみなくちあれ川賀
茂の御田代ひきうゑて今ぞちる家の神をまつらん 日次紀ニ曰農夫

歳首酌春酒其田憂旱者称
浸厭雨者称乾祈年祝詞也
本朝世紀長保二年二月詔曰
今年春漸中天仁之農事欲始祈年穀是恒例事奈利故是以
吉日良辰遠撰定天差使禮代御幣遠令捧持天奉出賜布
東作之日与利秋後之時仁至尓末天雨澤随時水旱不毛五穀
豊饒尓萬民樂尓恵幸賜天とありさま朝廷恒乃典にて
其俗今ハ田野にのミ遊りあらし漢志云天子以建辰月祭靈星以求農耕靈星天田星在於辰位故農字从辰又朝野羣載曰初任國司國中之政神事為
先致如在之厳奠須期部内之豊稔是いかし諸国まて
神事を重くせられしかとかくのごとし其神事ハ国中
乃豊稔を期といふハ省農を勧らるゝをいれる盛きこと

あまねく国の守乃正月吉書といふに神事を修し勧
農をさきとよし書きあるハ是に本州をつくると
りや小條泰時の貞永式目の第一にも可修理神社専祭
祀事と載られ　後宇多天皇大御歌天津神国津やしろ
をいはひてぞ我わし国のくにハをさまる

種浸　夫木集傍の男が小田乃あは代さめちへて宮乃早日
ならしつらむ又種加須とも云加志ハ淅米をかし
よねと訓ごとく物を水にひたすを云ひやか
次又つばかひなどいへり凝結ると釋せる詞ぞ今
種下　院百首たげのを苗代にきとはせまて穴
そふなれに種おろしつる一本に種かしきつる
浸種　宋耕織圖○毛詩實方實苞注方房也苞甲而未坼也此漬其種也



蕃名パアジイウエーケン

種稲子を水に浸けなば其水を種井と云俊頼集に秋かはしろのおし稲をおもひいでゝ春ぞ種井にまきをとかしけれ備中の邑名に稲井あり金葉集苗代の名によめば是稲種井より名しなるらん親元日記籾井とも云名字なり種かしの法ハ凡仲春土用中但早晩ハ地道に應べし稲子を俵に裹ミ渠川又ハ井の中に浸すと約一七日許地道によりてハ八九日より十日十一二日浸置とあり又夏の土用五十日前に種稲子かして田に下ろすなるべしかくて稲子の甲少坼るを芽秧と云是を苗代に撒なり毛夜志延喜式に在り又實蒔にまくとハ甲拆坼て白芽を發してより蒔なり多く田に之を蒔てハ多く浮風に散て地におちつくぞ之を俗に帆而其芽秧を苗代に撒掛と云東坡詩に拙稲芽く作もり稀稠のむらくなく能撒つくなすを專習し業となしてハ整ねなとや詩に却行手奮揮なく佗まるハ跡立ざりして撒るといふ漢にて布秧布種といふハ芽秧を秧田に撒佈なとなり續貫行曰諸ハ種籾彼岸の中より日數三十日種浸し八十八夜五六日前苗代種まきたりしに近頃ハ日數十四五日又ハ洗籾などゝ云て二三日おくらして蒔ともあり又也よき様に覚れど八十八夜過て蒔うる時ハ米作あしく且植田をむりしハ五月中迄植うるに近年中ころより衞植はじめ半夏生迄もかゝり早少女の袖つまいまだ乾かぬにお面の麦ハ萌るやうに浅ぬまバ万さし置て此ことなしと称しとぞ畑にもや一番草の頃来るに畑物の介錯おくれてハ南らバ野草にゆうんとすれバ役々あまりて是にかゝり彼を志ゆふ程につひ秋も米にあまりて早稲の刈節来り年中作に追るゝ所あり云識畑にてハ五月節より植そめ

て夏至にハ太かり
しをまふといふ
佐苗 万葉集○早苗とも書りさなへハ稲苗に限さる
名にて佐ハ農事の總稱なり一説に和佐田などい
ふ和を省けると
いふハあやまりぞ
初秧 宋耕織圖　早秧 天工開物
蕃名スプロイツスル
新秧のまだ針ばかり細く短きを筒苗と云漢にして秧鍼
緑鍼などいへり三四寸許も長立てみじくしきを初苗
玉苗など称ていへり凡早苗ハ苗代に撒つけてより五
十五日を抜栽の期とす之を過てハ節さかめる故に四
十五六日にハもや抜遅し 和ハ三十五日めを期とす故に卅八九日めにハもや抜遅し

早苗採とハ苗代より抜て田に移植の時なり漢に抜秧
といへるハ急き採を雨の霽間を待ぞ双手にいそぐな
どいふ挿秧の詩に抛擲不停手とあるに合り苗うゑ
とさづのとさげのめともいふ新猿楽記に五月男女とあ
りあるハ小苗少女などいへバをちく婦女のな
りわざたりけてをいふ漢にて挿秧婦などいへりき
信濃にてハ田を殖る男をとふといふ續貫行或老農曰
むかしハ殿様とて眠む詞といへり
田うゑにハ早少女を撰にめハ郡しとしこハ代をかさ
傍にて早少女とはやしゃでまて植ることハ早少女に
任を通し苗の柔なるものをあつかふ男の取行へり

實隆
日數
小田の
遠近

爲家
神の
苗
八少女

ひてハ苗いくてに植るにハ苗株を折て田にさしあるハ
づまにも男のうゑて其田ハ出来ざるよし古法のごとく
田植にハ早少女の袖をつらね笠の端(ハシ)をならべつまて
田歌をうたひ田の神をいさめなやして植る時ハ穂に
秀(イダ)を生して出来よろし扨いそ苗淺去してハおよねお
いるとよいふ留(トヒ)りて穂を拔時を孕(ハラム)と云實(ミ)入(イル)を生(ウヘル)と
いひ葉の梅いろとなりかうむるといへる是ハこれ稲子(イナホ)
を産(ウム)の孫(マゴ)を養をいふし又稲をうるふさとハを
これの田代にて嫁姑(ヨメシウト)おまじりて植るときハ田作の
出来よきこと自然なりといへり○小苗ハ忽ちよくて田

に在るを下起(オリタツ)といふ小苗の延過るをいへり亦おひ
ゆくなどいふ節(フシ)あれハ節序(オリミホ)の後(オクレ)て稲茎(イナガラ)のくらく延るなり
緊鋪なにいろ涼く門田乃ほなへ蚊になり急ぎなきの
をかしたゝぬ皆に又首根好むめ乾御田作るなハ
さはきた淺にかりいりでやゝ苗おひれてそすれ○農
書に苗代なりけ引の事種を蒔て十日なまで甚少
しみ雨る時水を落し二日ばかり干其後ハ又元へ合干す
ともあるべし但苗代を熇(ホシ)おふし雨ふるともあらバ先
をかけて根を南の土にうかぬやうにすべし○苗代の
秧(ナヘ)長(サ)三寸ばかりに及ぶ頃をひ見をとり一區(ヒトマチ)ごとに分(ウヘ)

栽なり唐岑参詩に水種新挿秧といへり其栽に苗の根
を漚汁糞汁に漚しつゝ土宜によりて或ハ二三本或ハ四
五本計一科として科毎の間を二尺ばかり疏て條ゝ斉
ぞ碁枰のやうにいふなり丁寧に間配をなし漢書朱虚
侯ゝ耕田歌にもまばらに整直にうゆるをよしといへ
り○凡水田の稲ハ種糯共にみなおなじ山田などの風
あたりにハ短き苗をうゑ深田にハ長きのをうゑて大
水につかられぬやう苗をなし或田苗をさまそりぶ数の事凡
一段の田ハ三萬を中分として是一歩乃田に百科なりと志
かれども地に肥磽ありて農に厚薄ありて大抵加賀州など

の上地ハ一科の間二尺許にして初より農具を用ひてさ
れば其草を引き根をたちらゆるなどハ六七度に及ぶと
いへり○摘田といふは実播田の事なり深田乃人の脚
を立ぬなどにハ直に籾を蒔て苗の足跡に及ぶ須に滋密
となると耗去て其残る苗の長して稲となるをいふ
といへり○凡田の名ハ放渟なと先秧をとれ其より熇
し挿畢て浸入五日して復熇し復亦浸すとあり隋其
水土によつて適し○凡苗代の苗を栽餘るハそのまゝ苗
代に立置て一郷一村の中にも或ハ苗の損傷或ハ不足し
たるものに分与するなど古法なり

田作（タツクリ）古事記○出雲風土記佃字を訓　文意考曰祈年祭詞に手な肱に水沫かき垂る向股に泥かきよせてとり作らむ奥津御年とハ民どもの田作とて水にみち沼におりたちてくるしき業するさまを云○日次紀事曰正月以小眼目魚名稱田作毎物供之要之集に山田さへ今ハ作るとちる花のかごとハ風のおほやざらなん

宇通　書紀○耕の字宇知と訓　應神紀に又名つくり

佐久　萬葉集に幸の字佐久と訓めり　父母がかしらかきなで幸あれといひし辭ぞ忘れかねつる佐久ハ作の字を假用ぬ

田反（タカヘス）新撰字鏡

草切（クサキリ）書紀今久佐義留といふ

草引（クサヒク）萬葉集田草引といつまで

草取

耕耘　管子○古文作畊　正字通凡致力不息謂之耕又假它事代食若力田然亦曰耕○耘亦作秐芸　耘説文除田織也　詩傳除草也

穮蓘　左傳譬如農夫是穮是蓘穮除草也蓘壅苗也

田作　史記居民得並田作不失農業

耗稲　杜集註耗去苗間草也

蕃名ランドベプルウゲン　耕　マアイエン　耘

元正天皇詔曰國家隆泰要在富民富民之本務從貨食故男勤耕耘女修紝織家有衣食之饒人生廉恥之心刑錯之化爰興太平之風可致凡厥吏民豈不勗歟又同紀養老五年令天下諸國擧力田之人とも見えたり耕農の道を勧奨して百姓を愛恤せられしハ帝の世を經るまゝ皇々としく求て得ざりしが如し亦英特の主とましませし書云惟土物之愛勤稼穡服田畝無外慕則心之所守者正而善日生也説文男字从田从力言用力於田也○明紀宣德五年上道見耕者下馬從容詢其稼穡之事因取所執耒耜三推耕者羅拜上顧侍臣曰朕三擧耒已不勝勞況常事此乎人恒言勞莫如農信矣凡田を耕すに早稲遅稲の田は兩時に反し晩稲私稲の田ハ偏時に

反をなす畤音労集韻耕田起土也両畤とハ一たび反し一
たびハ右より反し両方に交て其間と畔のやうになせ
る其偏畤とハ一遍より起して一邊にあるこ取魚鱗の
ごとくなる綫つらなり但剛地ハ両畤にし泥土ハ偏畤
にせり神楽歌に總角を早田に遣てぞおもふ何をせば
しるや妻すらんといふを總角ハ使ひ童也早田を治
んとてわらハ出しきつるに太なる妻を何もせずして
なひや居らんとなつらひまうやと注しぬ古人も耕事
をいらつきにせしとおもふべし○先田作の事ハ其土
を耕をに始るをを打起しといふ雅言にはあら田をへ

しと云荒小田とかへすをはなどハ俗言一番打起
年の秋田と作業におなじきあるを兼盛集に沢水に蛙のなくハかれ
まておりハ聊耕乃古訓なるをひにかり遅くやうらんまの小
山文を記なれおりへれとも亦土を犂起といへる故に
田犂の名を於古志と呼ふ事に此月田ハ獨起と云ハ
土尤性冬ハ重く春うけて土軽く起し易き也種蒔直説
に犂一擺六といふわかり一度牛にて犂起し六度ま
と墣塊なきやうに擺碎とらふおもとなり大納言長親の
よめる志げの中ら門田乃畊で何されるかへしをくを
秋と田乃こて此長親卿ハ南朝の名臣にて耕雲千首あ
ハんなきりしいひしさる北朝の後乃書に明魏法師とあるも
おもされハよて注せり韓退之詩に謝病老耕墾按字書墾

音罰耕起土也又周語云王耕一坺詩七月篇四之日擧趾
亦坺墢にも作る
大田篇俶載南畝皆打起のことなり又開荒をも尓いふ
甲陽軍鑑に大抵犂をもて立春より耕し始むを一反打起
打起とあり
といふ其後二月の初頃まで耕を二遍打起といふ此時
耙をもて把平と荒塊読といふ凡耙にて田土の碎をよ
く細にするをいふの詞なりといふハ行を逐く細
里暦升のごとき是なり又二月末ごろ復耕を三遍打起
といふ亦中犂とも云ふ此のときに耗を以て土中に蹋
込み或ハ澆糞して手上は耖にて把治る状耗読といふ
細に土状解くるまなり　農政全書云犂以起土惟深為功耙以破塊惟細為功耙之後又用
耖耢　用耗よこの時ハ耙の歯本状竹にて編み歯を短くな

して用ふ是漢の耖に當れり歯を短くせるハ泥中の耗
にはたらきやすからむ為なり此時泥田殷といふ者
を着田の上を行き耗を履ましむとあり又泥田殷を大き
く作り其上に乗り馬牛に挽せて田を平磨なり是漢の耢に
當れり又牛馬に立入がたき深泥田ハ田橇を著或ハ竹
を打ちがへ泥上に亘し此に乗り大把まて把盪るなり
○稲田にハ冬月より水を浸置べし大かたハ一遍打起
に水を注かけ置し涼田ハあらしめとなり日にあつるを
当にすべし水ふかくして日氣下まで徹ざれハ苗さら
えぬなり又田急井にかりなど為の自由なるは従ら

康熙帝

塍田六月水泉微
引溜通渠迸若飛
轉盡桔槔筋力瘁
斜陽西下未言歸

夫木集

ち川のとかちかふる稲なへのさみだれよ晴間とみてや田草ひくらん

ぬくしく底まで日氣のとほるゆゑ是亦山田里田よ
て斟酌すべし凡一番打起より後漸くに反しかへし土に
春草萌いづれをおこし起をなるたけ土中に犂さめば腐て
肥となる　羣芳譜云犂田須犂耙三四遍青草或糞壌灰土厚鋪於内奄爛打平方可撒種則肥而發旺〇
繼體紀曰帝王躬耕而勸農業后妃親蠶而勉桑序ひらし
八和漢共に帝皇乃御田ありて漢にして籍田といふ　亦作耤
禮月令云孟春天子帥三公九卿躬耕を帝籍といふ今
仙洞御所に御田ありて小苗乃時に及んで京師大原八瀬
の賤の女一村〳〵の歸つまたる摺文の浴衣を表にし御
所に参入し苑田に早苗を挿蒔なり婦人を是と観ること

とも織得ども丈夫を個ふこときへ免されざなり　天
照大神齋庭の稲穂を耕種させしめたまひし故実に據あ
るにや本朝世紀曰六月卅日大祓今日彈正官人等令祈
宮城中田畠等傍頼斎に御園生に麦の秋風そよぎきて
山おと〳〵きかれ土のび時なり御園生は宮中の畠なり　凡京
師加茂松尾等又諸州まて神田に耕人を促して方々よ
り自ら来て早田を植つくれを御田植といふ本藩にて
千臺新田大隅霧島神社などにも此事あり風俗の俚歌
を唱へ棍徒の戯技あり又摂州住吉の廟御田植乃神事に
和泉律守乃女郎ども青色の羅衣に玉襷して菅笠を
着其内に法師二人纏を穿長刀を杖つき雑兵どもと奴方
より出向ひ棍刀まて打合ふなどもするはこれ神功后征
韓の軍装をまなびぬるよしいつはり盛なれる皆いふし
へ田舞の遺風なり又志摩国伊雑宮の田植の神事にも
鮫二喉づゝ浦口まで来り後立返は例年の事やとぞ〇

高田ハ深く耕へし若旱されバ久保ちて実のりあ
し 高田ハ神代紀に阿計多と訓り 沼田ハ浅く耕べし 沼田ハ天武紀に布計多と訓り
西土(モロコシ)福建ハ水田多く埴(ハニ)土ゆゑ深く耕さずて草木葉を用
ゐず土糞をつかひ或ハ牛骨を砕き入る後澳ハ菜蔬に
用ゐ前澳ハ葱蒜に澆ろなり是熱国なれバ二便を稲田
につかへバ反てわきかへりて蒸気を生(ナス)じかへりて害
となる水源なく多く天水を承(ウケ)或ハ水車にて注(カケ)入るゝな
り其稲茎(イナカラ)軟弱(ヤハラカ)にして僅に風吹ば倒れ臥て附たる穂て
水車我転(トバ)て冬藤やはふたゝび起上ると云凡上田の
稲ハ偃寝(ワチメラ)してもおのづから起上ることなり按に西土(カラ)にも稲ハ

閩中を第一とす猶また詳に南産志に志るせり蓋其土
壌埴(ハニ)なれバ早急なり之を沖縄人に咨問(トヒキク)に閩中にてハ
苗代の秧(ナヘ)を抜て挿(ウエ)とし其後二番苗代として最初植
つけし稲の稍長くなれる根株(カブ)下毎に二番早苗を
挿(ウエ)つくる此二番苗は最初の稲穫(イデキ)へしたがひ長り孫(ヒコ)居れ
ども初度の稲熟て刈取(リ)其刈株(カリカブ)を犂(スキ)反(カヘ)し二番稲に壅(ツチカ)ひ
肥(コヤシ)を澆(カク)ぐれバ其二番ものこり還(カヘリ)て初度のものより盛長すると
いへり 按天工開物云南方平原田多一歳両栽両穫者其再栽秧俗名晩糯非粳類也六月刈初禾耕治老膏田挿再生秧其秧清明時已偕早秧撒佈早秧一日無水即死此秧歴四五両月任従烈日暵乾無憂此一異也凡再植稲遇秋多晴則汲灌與稲相終始農家勤苦為春酒之需也
此ハ土性のよく寒晩きゆゑ

此稼をいへるなり肥土の田地は早稲の二度植殊に試るによ
きものなり○鋤耘を耑耕夫の急務也何種の美種を播殖
何ほどの碩苗を出芽たりとも之を鋤し之を耘て其莠
を除き其根に秄ざれば親乃子を出産て徒に苍市
に葉るがごとし秄とハ土養まて作り物の根に土を壅
覆て養ひ又之を培壅といふ土を倍て根の際を壅ぐ
となり又他より土を持来て秄と入汁持土といふ漢書
に取他處土為客土是なり呂氏春秋に先生者為米後生
者為粃是故其耨也長其兄而去其弟又鋤し耘ざれば旁
の莠草は土の精氣を奪ふのみならずあしきものを

滋易く好ものを育がたき世乃常なれバ耕種ハ勤て緝
養と怠なきやうにして秋成の功を穫こと遠し大抵苗植
付より廿日許に一番草とりて稂莠など一つも除べく
抜き捨し又畛を浚て水の通よきやうに導き通し草
引五六遍のうち苗の時にゆだんなく取去るやうに
手入るべし苗古く繁れば其蕪におされて穢草生立ざ
除ことのあり乃草ハ苗乃根に踏たて排ゆさり或ハ稲の
根を耗しえて浮根下葉となりもして穂先に実い
りかのうすきやうになるかけ通し農書芸稲篇禮記有曰仲夏之月利以殺
草可以糞田疇可以美土彊薅耘除之草久則腐爛而化土
肥美嘉穀蕃茂矣大抵耘治水田之法須用芸爪不問草之

有無必偏以手排漉務令稲根之傍液液然而後已削揚厥土使泥農家皆用此法又有足芸為木杖加揚子兩手倚之以用力以趾塌撥泥上草薉擁之苗根之下則泥沃而苗興其功與芸爪大類亦各從其便也又云苗高七八寸則耘之耘畢放水曬之欲秀復用水浸之苗既長茂復事薅拔以去根莠

飼敷

和訓栞草木葉を水中に漬し置て田に飼ひ養となす或謂刈敷なり或謂木敷也伊豫の山中にては末をおろし焼て灰とし敷と稱るとあいへりと又浸種と種かし淅米をかしよ稱ふど訓るをおもひ合すべし

保登呂

淤蔭 清 耕織圖 淤水中泥艸也六月稲苗旺時放去水乾将亂艸用脚踏入泥中則四畔潔淨用灰糞麻枯相和撒入田内曬五七餘日至土乾裂時放水浅浸此月正宜加力也

耗 音耗 正字通以草木葉糞田○類篇吳俗以草木葉糞田曰耗

蕃名ランドメステン

按に穀葉ハ国より草木一切の養ハ出ん下糞を第一とし足根張に養を受留るによりて心を徹て養ひ届るまで下糞を施し而後乃澆糞許まそハ地中よりの上氣を醞て本株に腐草附而虫を生じ下葉より枯上るさへもの里されば飼穀といふものを蒸て地に養を穀盛乃実言よりいひ習せ侍なる箇し西土の耗ハ苗種て後にふにはし見えぬ

○凡稲田には春の末草嫩芽新葉を發と相視てこれを刈とり三番打起の時田中へ蹈入肥養となせり木芽をば山かしきといひ草葉を田かしきといへ稲ハかしき

爲相
奥ふかき小田乃淨ゑせきあへて草かり入る賤がなハしろ

宋樓璹
殺草聞吳兒
灑灰傳自祖
田田皆沃壤
泫泫流膏乳
塍頭鳥啄泥
谷口鳩喚雨
敢望稼如雲
工夫蓋如許

の敗爛に堪ひ根より堅くなりて浅実を結ばずして尤宜し
肥糞の之を澆ぐは葉稈は浅く盛まで穂を出すこと
短く縮み粒脆く米少し又土脉の温潤あらざる地はか
しきを用ゐることを来年まで消化せず自若として存する事を知
るなり是は泥田などの地底より冷涌暖に薄く地冷る
ゆゑなり因て泥田にはかしきを入ざるがよし○耗は櫟
櫻樸樕樝葉樹接骨木胡枝等の嫩葉をば第一として一切
の草木皆用ふ但し櫨榛の核仁ならびに土精の強き地は
皮を剥ぎたる楮幹或は胡頽などの木幹を入るに一七日
許して皆土と化す事あり是は一ぱ地極めて煖つよき田な

是然ば糞に各地の熱と寒あることを辨へて温なるは冷
し冷なるは温まる物を糞培し畿内上田のごときは肥
糞をつかひがたく皆小便なり大和地方は獣毛を以農
とす○物力なき百姓は七八月草木の芽茂刈とりて地に
埋めくさらし冬中に田に持出て打起して又かしきを
入るなり又そうして小草生ぜざる所の土をとりて皆かし
きの代りに用ゆることを伊賀にては土中より赤く光
る石のごとき土を出せるを島と名け田の糞とすとい
へり○山の注出しの澇土池沼の乾泥溝川の渚土最よ
し就中一年中煤払などの時又は餘時に床下の埃土を

撒置て田畠の下地に糞と爲し○村里は大根の穀種實に
浅くうゑを用る事あり其外に蕨薇類亦よし雑草を厩に入
まて馬に踏つけさせ便溺の滋潤を得ば丸毛肥なるべく
ふ海邊は海藻を干し把て厩に入置かしきとき塩氣あ
るを好とす因て雨に濡さゞるはあしく又稗の糞をとり
搗碎き一段に一升許入ることあり其外一切の狭小魚を
爛らし牛馬等の骨は皆碎き用ふべし漁者多き所は魚
桶を掘埋め魚腥汁を浸し數日もれば醱熱して土のごとく
なる山人の菜土と相和し此等の類は俗には田作と呼
ぶ讃岐は海より取る小魚の多くとられざるを

いふは讃岐にて鰯乃価まさるといふ又鰕の異名を田
作とよぶゆゑ干鰕とぞて肥ともするによる鰯鰕は干鰯て
多くこやしとすれば甚實のりよく米穀おほく収納す
其干鰯なき邊は穀毛もよくもならざる所なれども鰯の取
ざる所を肌膣年といふさるまでも魚の田作肥を用る
は瀕海の民かしまを得ざる所この業なり魚肥を土に
入ざれば當年は殊に絶て出生といへども翌年は去歳の
一倍などもみつらざれば土氣瘠て漸く衰へなる所
あり○粉肥といふは凡穢遺の類一旦の佐久毛は宜し
といへども後には地の衰瘠倍にせざれば物の實より

らば因て厩の數稾麦の稍市井の溝泥糞堆道路雨濕斜
溝の泥壌皆一に混同せ雨露をうけ日を経て醗酵熟
かる時移て肥子舎などに儲蓄へ人糞を澆灰をふりて糞
灰の氣かくよく敗朽てぼろ〳〵となりたるを実播の稲
且か麦粟蕎麦の類などに撮種敷肥などに用ふ又油滓
米糠類なども力あれば浅うけ調和ぬれば宜よろし○水肥
こいふは人馬の小便斛溝の名混浴の汁米洗の糟焼酎
粕魚腥汁類に人糞をまじへ缸桶に貯蓄時に従て澆灌
なり熱して肥ハ舊くいさしきなど宜し生くあるべし
きは一旦ハ害になりて後に實付よくなり○沼澤田

なれば馬牛を入れて踏通蹂躙せしむべし然れば
滓泥をうごかし稲の力を宜し田地を牛など大木な
ど引かせ通るなどにより初ハ田地肥土を引発して熟
熟ども人馬の足跡偏く蹈しめて自然と脂潤の氣地に
和あひて豊歳は捻お稲の登を助し得ちかるべし○歳首
の雪ハ有年の瑞といふ乃謂古歌にもあり万葉に新
しき年の始にとよみしのたまへどもあらし雪のふれる
ハ文選雪賦に盈尺則呈瑞於豊年とも又信南山全書に一
雪入地三尺三雪入地九尺故三雪ハ豊年の兆なり是ハ
一度めの雪地に入三尺まて三度めにハ三〻が九尺地

に入て土の潤澤となるたすけとなれハ又天工開物云凡旱
稻種秋初收藏當午晒時烈日火氣在內入倉廩中關閉太
急則其穀黏帶暑氣明年田有糞肥土脉發燒東南風助
煖則盡發炎火大壞苗穗此一災也若種穀晩涼入廩或冬
至數九天收貯雪水氷水一甕交春即不驗清明浸種時每石以
數碗激灑立解暑氣則任從東南風暖則此苗清秀異常矣
是冬至の節雪を氷水と收置て三月種かしの時一石に
數盃汲て灌ぐれば其根葉に虫つかざるとかや されハ雪
氷水よく虫蝗を殺し暑熱を除く徳ありて大雪降る年
は虫少しとの俗説あるに似たり 唐書云長壽二年元日
大雪其夜賀明而晴上謂侍臣曰俗云元日有雪則百穀豐
未知此語有何故實文昌右丞姚壽對曰氾勝之書曰雪是
五穀之精以其汁和種則年穀大穰又宋孝武帝大明五年
元日降雪以為嘉瑞雖麒鳳亦何用爲此等に由てみるに
菜豆の雪を豊年の貢とはいふなるべし古には元日に大雪
降れども凶歳の例あれば是を祥瑞めかす人のいひ出
しぬることなるべし但東北の地ハ田に畠を用ひずし
して稲田菜畝のわかれて熟しきハ冬より春を終まで
雪封て寒潤即肥となる 故に北國の物ハ雪になれて雪
にかへ実らず凍氣の麦ハ澂風といひなど各其土地に

因ても性おのづからひとしからず
田盧 万葉集○
田居 即盧也 書紀人名田井あり田居ハ即田舎にて田舎とハ田
居中の義と略解にはいへり○玉屑といへる書に
未井と合て耕しゝ田舎を井中なるべし　盧屋　借盧
とおけるいあまりは倭會なる説なり田いほと
以上万葉集　假菴　玉葉集　田菴　夫木集に見えたる田いほと
あるは俗に田菴小屋と云是也
田盧 毛詩中田有盧疆場有瓜○漢志在野曰盧田中屋
也○史疏廣傳自有舊田盧子孫勤力可以供衣食
守舍 三才圖會○眞西山言農事之叙云縛草田中以為守舍數尺容膝僅足蔽身
蕃名アツクケル．ワツト．ヒユツト
萬葉にもかくよみぬる百代小田を刈みだる田廬にを

れバ都覚ゆる庵とハ賎の屋ハ卑て地におふせるゆ
くなれバいふとぞ本藩阿多郡に田布施郷あり三代實
録にハ多夫施と作り此いふしへ婀娜國の中にて安
閑天皇屯倉を置れし地なるべし故に着禾田戸を設て
鳥獣を逐ひ窃盗を防ぐなり又山田守翁といふは田禾
を着守するものにて今の作番人なり稲公跡見荘の歌
に石上ふるの早田を秀でずとも縄だにはへよもりつゝ
居らむとみの荘とハ今の屋敷にて又田中にあるを田居
といへり毛詩注古者民受五畝之宅二畝半為盧在田
春夏居之二畝半為宅在邑秋冬居之宅即今の屋敷なり

邑ハ郎荘まて村なり今百姓の名字を何村何門何屋敷
といふ屋敷ハ即邑宅なり在田ハ田廬なり農夫の作場
遠方に在ればその廬に居宿て耕種するや万葉に秋田
刈借廬を作りいほりして在らん君を見んよしもがも
又山の下廻の田居などよめる注に里をはなれたる田を
ころに秋ハかり菴作りて稲のわざをなしそれを田居
といふなり軍防令に防人どもが田には注に荘舎とあり
る今の荘頭と荘屋などいふの類なりまた刈穂乃庵
とハ刈たる稲をしもんで作りたるなり山田なる門
田なる小田なる賤などもよめり

曽富騰 古事記○即鷹偏也按に古事記久延毘古者於今者
山田之曽富騰者也此神者足雖不行盡知天下之事
神也是より此神像を田の中に立しが至ぐて鳥おどろ
かしとなりしにや曽祢好忠哥に山田もるそほづも今
はなげめきをなすものと是有りけん又備中国湯
川寺にて僧都玄賓が山田なる僧都の身こそ哀なれとよ
みしハ僧都と曽富と音通ひきをもて謂れ書紀
通證に人えらみ又負述が添水とかしと経説あるを
隋板萬葉集畧して比と云り又あさ
引板多といへり
里かしおまるのかし一説に鹿
ぐしと云俗に麻おどしとも云是なり
ふ 鳴子 書紀
通證
鳥威 日次紀凡作稾人驚走鳥獸者謂之
安民或謂安立木又以竹筒木片受
水流使其有激觳者謂之賀呉々々此等都稱鳥威按に今
單に威とぞありを云賀呉く八物を畏まさしむるの事な
里俗に賀呉毛布
とらふがごとし
鹿畏 下學集案山子の字を充さ
里諺ハ古に加志と訓め
鹿奔なる
兎鼓 鼓同上亦鹿
いとく鹿と

後水尾天皇

仲正家集

鷹偏　天工開物ニ凡穀種生秋之後妨雀鳥聚食也立標飄揚鷹偏則雀可敺矣　艸人宋子虚詩

蕃名モレイキ　トインスポーリ

崇神紀以夢辭奏曰組縄四方逐食粟雀足鳥逐の志とのみえし始なるべし八鹿家の類稼苗を傷ひ害の患多し春秋に田獵をなして禽獣を逐ひ除くことありしを麻柄ともいふなり万葉にして岡田るといふは山田には野猪などの害るを防くや又今の鳴子ハいにしへの鈴奏に出しときこえぬ園槐鈔曰諸社比鈴奏懸鈴曳之とあり西土にても鈴索　五代高祖紀　鈴架　唐昭宗紀註　設架懸鈴　といふもの鈴奏と相似たり冠辞考曰引板ハ名に何ふごとく火をもいふべくまへゆくせ為て人ありてひきならす田所あまり引板とかけに河原いるとハ名のかぞとて寄をなすしるおどろかしなりとまで彈といふものともいふ又宛委餘篇云以板激水以鼓之田間防禽獣之器也之を水碓といふもの也といふなり○秘蔵抄の歌に同枯して粟穂まもるなる何ぞかし古鳴竿わちてましらおへうなひと鳴竿ハ竹竿頭に鳴子を結てそれを鳴して修山里の縄り鳴を猴などにちぎられじと卯童に逐せらるるよしまさ栈畜に穂志あさ河る志らしまやこの小山田に麻乃西なあろ穂志あハ穂をとりて鍬をとりて蓑笠をきせて立れば麻の田

我ら波ぬなりそれを遠きといふと注しつるも陸銈か詩ニ清
明日薄晝陰々籬外ノ新秋短シ似ニ鍼縛ニ草象人田畔ニ立借ニ他風
力ヲ逐ニ飛禽ヲ是らの藁人のおどしなるべし又明日よりハ焼なあくし
てし小山田乃我ら稲を爲をつくりなる焼なあけ馬な
どの尾髮を剪てなきここちんを焼て田にまたつるや其臭
を嗅て鹿の田と畏ぬなりそれを焼なあさいふと注せ
るなあく八標繩より出て標限の意也ニ鹿畏をいへり
○冠辭考ニ鹿火屋ハ涼山里にて猪鹿を逐へき假菴ニ
儀入居て一板を鳴らしなるとたて且其火をすべらほうことを
焼き草などとくゆらするに人ある故と臥して臭との

の田にお附ぬなり是ら焼禁にて獸ハ火氣と臭ハ熟路
をも避て近ぬなんぞ○凡いまだ穫ざる稲田にハ鴨鴈雀
烏鳩雉をつねに怖くハ枝ならされと已に刈て曬し
置たる沼田などに鴈鶩剌促をつる時ハ數十斛の稲子
をは食ひ荒し剰へ稲莖ハ悉く泥中に踏なし一畝二畝
の田町なども八僅一抉の間に牛舎のやうに踏なしたるの
なりかくハ故ニ名ありて現人さへ驚かぬゆゑ鹿かし
なとの藁人をそのことにあるよしなれバ詩に難奈飢鴉
攫ニ錦鱗ヲ藁人蓑笠立ニ他邊ニ慣看来ニ筬高如ニ故豈憶ニ他時假
假真ましてて山谷の傍近き畠にハ野猪ハ稲稈ハ我抱さく

らひ麻は秧とともに穴へ植麻の群をなし跡などにも大
木株引通せしかごとし因て百姓秋は金鼓を鳴してと
駈に逼り宵寝ざるなりさまでに因もせぬといふ千
町の廣田などは五人十人の力にて追がたく後は雁鶩
を金鼓の音抔で馴ぬく撃ども叫ども驚き逃ずと數群
相立て首を突貫て稲穗に入くどこまでも喰ひつめる
て田地の跡さながら人馬の蹂躪せしよりは
さなし天武紀童謡に我なまの深田に何ぞなりなむとい
ふも田に災あるよしや是農家の大厄甚なるなれば訪
に田なし故に守舎を立て弶擭を施し切く駈捕ねらふに

已に術なし　豐後風土記頸峯下有水田此田子鹿恒喫之田主造柵伺待鹿来挙己頸容柵間田主捕獲将斬其頸鹿請云云田主大懐怪異放免由時已来此田苗子不被鹿喫今獲其實因曰頸田兼為峯名柵八郎鹿垣也

田儛　天智紀　田樂　朝野羣載　田踊

按に田樂はいにしへの田舞にて中昔より一種の舞曲
となりてはやされ今は僅に其部民の家のみ存て田舎に
は御田植の土曲などの中に片端乃趣ども見えたる蓋
其初は古語拾遺に以竹葉飫憩木葉為手草とあるを
や生源起なるべき手草とは竹木の本を結合て舞なる
もの仮に垂手として舞なり是今田間の農夫等が田
踊などいふ類にて飫憩は桶を置なり木桶を打覆せて

范至能ガ詩ニ
高田二麥接山青
傍水低田緑未耕
桃杏滿村春似錦
踏歌椎鼓過清明

神楽歌
採物

其底を敲き拍子抔より舞をなやし神の代に槽桶と
どろかせし遺風にて田間乃事なれバ太鼓つゞミの代り
に桶の底をたゝき歌の曲を和する純朴なる俗なるべ
し手拍子を後ハ銅鈸子といふ器を用ゐて一種の樂器となしたりける　假續紀　聖武天
皇天平十四年正月天皇御大安殿宴羣臣酒酣奏五節田
儛又三代實錄貞觀元年多治氏奏田舞其式の事ハ貞觀
大嘗儀式に田舞ハ内舍人六人内竪六人大歌生二人彈
琴一人笛工一人御琴一面とあり琴笛ハ神の代の樂器
なり琴笛相和せしめしほしを美詐登尓布曳阿波世な
どあるハ宣命の恒例なりき大嘗ハ年穀の御祭なれバ
田舞の式を傳へて舞人員を今の田樂に合つるなれバ
ありける今又田樂由來の記どもを抄出合て考ふるに日
吉雜記に田樂の事神代地神始八百萬神五穀の精氣を
田地に下して有情の壽命を續んと計ひ玉ふ時即樂を
奏し耒苗栽殖る時舞樂をもて五穀を祭り給ふなる故に
田樂といふ社稷神の起也とも又猿樂濫觴に猿樂田樂ハ
猿女君の傳所れ神樂二つに分れて五穀の豊熟を祈り
しよりなり今の獅子舞を其遺風なりといへるもさもや
ら傳ろうなどいふハ本笛譜也といへり榮花物語曰加
茂の祭などにて 治安三年 五月に成ぬ大宮土御門殿 上東門院 に

おなじませば殿の御(御堂)おもなるわざをもして御覧ぜさせ
人々おぼしめして此殿の御まやのアくさの内ハ殿の
きざわづりせられけるをやまてうゑける此ころうへべ
うりわれバえむまの月めしてこの国うゑん日ハ例の
有様まなぐらはくるひさる事もなくておもしろくまし
うゐらみも有のまゝよてこの前のうちのむまゑの御
前より何事もつぶりせてうちうりさぼしてみさ備ま
わらべどもらのうこの仕いだをくだしてそわせ
御覧じやる尼きや(中畧)仕て御覧ぜればわうきた左なき
なき女ども五六十人ばかりにも襷をいふものいとしき

ろうきせく白き笠をきせそむくろめくろう鉄漿(カネ)付け
て紅(ベニ)何かう化粧やさせそつぶけたてうつ内何るじと
いふおきなかいとあやしき衣(キヌ)きやまてうる大笠もかせて
いもとさてありなきさうの何やしき様しうる女どもも
くろうい袴うきせそなふまとふかのむうそげ化粧(ケシヤウ)
りそまり笠なかせて足下(アシタ)もかせうり又でくがくらい
いてあやしきやうなる鼓揺まゆひつ中そ笛吹編木(ビンサヽラ)と
いふ物つきさまざまの舞してあやしの田のことども歌う
たひんちよげまむうて十人ばかりありその中に此
田鼓といふ物ハ例のつゞみにも似ぬおとしてころく

とぞなりしゆく中暑我まゝにめでたくまうのあそび奏さ
るさはどもいふどう、おりしもにそあれ雨そこし
ふりで田子のさわとぎを志げりけり時のおどろ
かきあつまりきん女人かずしらずなりぬるうちてころ
おどろきく、おかしう御覧じられけるに此田人どもの
うたふ音をきこしめせばさゝぶれにしてそぬかしてうし
ろ田を返す手とせのこまくさなやんみきこしめや
うたふるよりかずを志しまして大空をくりつれぞ川まゐん
まくさのいみそもさうたふ音流へ流くりいでつりけま
ばさまやの流うきのかずくへを勝ちていとじうけうぜ
させ給ふ

伊勢貞丈曰右の文を案ずるに殿の仰には田をうゑさせよとありて田楽せさせよとは仰ざりしに今日田子の出るにつきて田楽の者の出られしは田うゑには元定りて田楽はもちゐざるゆゑのなれバさありしなり本文にも見えざるごとく田子は田うゑ歌うたふ料なり田楽の者の中にもうたの歌をう謡ひまはりて舞ふ者あり鼓うち笛ふきさゝらつきてうたの歌をもはやしかなげる者ありけるとは田楽とは名付るなりうゑの田うゑの田楽は田子の心傳へ取の被るゝをいさめ慰めてはやさむとてげまさむが為なるを田の神を祭る神楽なりといふ説の有によりて一轉して田の法師のする田楽を所々の神社の祭礼に用ることゝはなりしなるべし

古事談曰 堀河帝永長元年大田樂事或人記曰七月十二日參內祈年穀奉幣定也今日殿上人田樂事州餘人云々是祈年穀の日とて田楽あるなり朝野羣載に載る匡房洛陽田樂記曰永長元年之夏洛陽大有

田樂之事不知其所起初自閭里及公門高足一足腰鼓振
鼓銅鈸子編木殖女養女之類日夜無絶中或裸形腰巻紅
衣或放髻頂戴田笠按ニ田笠は今も殖女の具にて中古
突出する笠なり古画に見えたるハ後
小田笠と云女の着にハ糸引とて色絹を頭に被り垂れ
より小田笠と戴なりとやらの佐奈女が悦かぶりて其
上より菅小笠お着 百練抄曰永長元年七月十二日殿上
にふ擬なりなり
侍臣有田樂事 續世継物語曰永長元年おほかた田楽とて都
に道もさりあへぞ神のやしろくに歩にい
ゐなるさ 今昔物語曰田楽さいい黒なる田鼓を腰に結付
てまきる
て袪より肱を尻出して左右の手に桴を持て或ハ笛
を吹き高拍子を突き編木を突き差て様々の田楽を
二つ挽三つ挽に備て女喧星吹つまつて粧の限りな

杁ハ杷の無衛物にて農具
しなれバ田楽ニ用るしなり 東鑑曰頼朝卿於大姫公御
方山際前栽被殖田実女等殖之皆唱歌又壯士中被召出
有能藝之輩為事笛鼓曲是田楽の事にあらじといへど
も田植に女を用て唱歌する世の俗ありしは見るべし又
同書寶治元年九月十六日相模國毛利莊山中有怪異等
毎夜田樂雑之由土民等言上云々按是北條氏が積悪貫
盈して高時滅亡の兆なるべし太平記に據に元弘二年
洛中貴賤田樂を弄ぶ相摸入道新座本座の田楽を呼下
して日夜是に弄ふ他なし其貴賤子万と云數を志
らずと又貞和五年洛中田樂を弄ぶ法にあつり尊氏是
を與ふる類なしされバ万人足を空にして朝夕

是が為に猥貴によからぬ事とぞなりける此時の田楽ハ既に一種の舞曲と
変じたるべし田楽由来に一齣ハ奉幣祝言を勤め編木
を摺りはやしをなし二齣ハ花笠を被り足下をとゞき横
笛を吹く三齣ハ小鼓を打下座五人ハ鞨鼓を打五人ハ編
木を摺り都合拾三人業の指貫を佩狩衣を着綾藺笠を
被り華沓をはくいづれも猿楽の楽器と同様なりとなん
云へり又豆腐を串さしたるを田楽といふハ田楽の時
一本竿を立て其竿に法師のまがり上りて技を演ずに似
たる故より名付しとなり常陸國誌等に據に水戸より北
久慈郡金沙山に田楽有り俗に夷と称し法師まで八奈

一金沙山権現祭禮七十三年丑の年毎に大田楽有之奇
観なるよしいへり是田楽の本原なるべし　又武蔵豊嶋郡王子村王
子神社毎歳七月十三日祭礼に生土の者共舞踊とて
之を典薬踊と云其中に踊子八人皆白さぎの装束被物
に面をかけ頭に作り華を挿太つゝみ小つゝみ編木等を
持て拝殿にて奏踊囃子の八笛太鼓のみにして古
風なるよし名跡志に著せり或謂是亦田楽なると俗に
称て典楽といふなるべし或ハ又田役といふ名にや據に
同村にハ石神井川ありて田場の用なり蓋石神井ハ俗神
まで石像の田神とせるに安置して遂に川の名とせしなる
らん又豊に王子稲荷社行り除秋毎に山上に狐火を懸
て土民火によりて田畑の豊凶をうらなふあり是農耕に所
由あると知べし
白石俳優考に引匡房卿田楽記曰其高足一足
及殖女養女の類といふあり殖女ハ田を殖る女の事に
て養女ハ蚕を養ふの女の事なりやといへり此考よく當

より今　高倉帝厳島御幸記を読に治承四年三月廿三
日に備前のこじまの泊に着かせ給ふ御所作りたる御まへの
のきとも新しくいらへのつまなる上達部殿上人などの
家などもつくり並べたり潮(シホ)さし乾(ヒ)て御舟着きて汀
をりしかば御輿(ミコシ)まてぞ仮ぶきをさせ給ふ御所の東のつまに
かりくみ屋を作りて入道内侍どもかしてまゐれさかしくの
ひたたれども錦を着ちいさき花をつけたるは人何れま
ゐてでんがくといふ女はあそびとともいへれ只おもんせ
よりかる絵ふに海のひとりより同おどりうたてまやかくらん
とおぼゆ田楽まで少しかけはなれたるの田楽といふか

のとみえぬれば女のなせる伎舞(ワザ)にて手粧(タヒ)さるは男の扮作(イデタチ)
せしも何ぞや女はあそびとも見えたれどらは記したり
おほに写(ウツ)せしは土佐集の画(エガキ)したるなるがその女は田笠に
花さして表(ウハウハヒ)に披(キ)たるはうは衣(キ)のさまにて尾く垂たる
べしされはいにしへの田舞てふものは女をのせ
しわざにや今も南の島に沖縄(オキナ)などもよし遺りたり
いれらは女はきたりて剃法(ホツシ)曲子(テヒ)のやうには変(カハリ)して志
やうなできたといふめり中津世はよくまく儒学せし人ぞ
も佛に迷ひて三昌氏などの印は見る所ある人もなく
あく法師なんたるはまれなる習ひより田楽法師ども

も出来らん思ふの細事につけてもよくある書をみれば
しらぬむかしはしくもにきしきもありて哩に
懐を感しめましてや是より後の代にいたりてはさらにそ
そのありさまをしのびもうらみなどしつべきすぢもを阿
らんかし凡ハ田うへる業ハ女にハ限らざれども其殖
るにハむかしより女を用ゐしおぼしに佐少女ふどとも
ら女の事にいひおとせり蚕の事ハ楮文なりき是等にて
田楽ハむかしの田舞の遺俗にてその田踊ハ又田楽の
根習なる紙しらべでもや按に周禮籥章云凡國祈年于田
祖則吹豳雅撃土鼓以樂田畯○後漢志云后稷之祀舞者

象教田是西地田に楽める始なるべし又范至能臘月村
田樂府の叙にいはく云余帰石湖往来田家得歳暮十事採其
語各賦一詩以識土風號村田樂府と事文類聚に載られ

成形圖說卷之四終

国立公文書館
National Archives of Japan